

社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成

～「主体的な学び」の実現を目指して～（2年計画の2年次）

梶原 隆一 奥田 陽介 塚越 武史 進藤 秀俊

1. 昨年度までの研究

平成29年度から平成31年度までの3年間は、テーマを「社会の形成者としての資質・能力を育む授業の創造 ～社会科における『見方・考え方』を働かせた学びを通して～」と掲げ、「社会的な見方・考え方」を働かせた学びのあり方や、その学びを通して育まれた資質・能力を見取るための評価の工夫について研究を行った。令和2年度から今年度までの2年間は、テーマを「社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成～『主体的な学び』の実現を目指して～」と掲げ、1年次は、「主体的な学び」の実現を目指して、研究を行った。具体的には、全体研究で示された「主体的な学び」のプロセスモデルを活用して、「主体的な学び」の有り様を明確にし、その実現のためにどのような手立てが必要か研究を行った。また、「主体的な学び」が実現されたかを見取る「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、その評価方法や評価場面、評価規準、フィードバックの方法などについて研究を行った。

(1) - 1 「見方・考え方」を働かせた学び

本校社会科では、学習指導要領（平成29年告示）で示された「現代社会の見方・考え方」、「地理的な見方・考え方」、「歴史的な見方・考え方」の3つの「見方・考え方」を、それぞれの分野の学習でのみ働かせるものではなく、必要に応じて3分野のどの学習においても働かせるべきものであると捉えた。3つの「見方・考え方」をすべて、もしくは一部を働かせることによって、社会的事象を多面的・多角的に捉え、より深い学習が可能となると考えた。図1は、この捉え方を図式化したものである。

また、生徒が自ら「見方・考え方」を働かせられるようにするには、「教材研究の段階で、教師自身が『見方・考え方』を働かせること」、「視点や考察の方法に着目して、毎時間の学習課題の質を高めること」が有効であることが見えてきた。

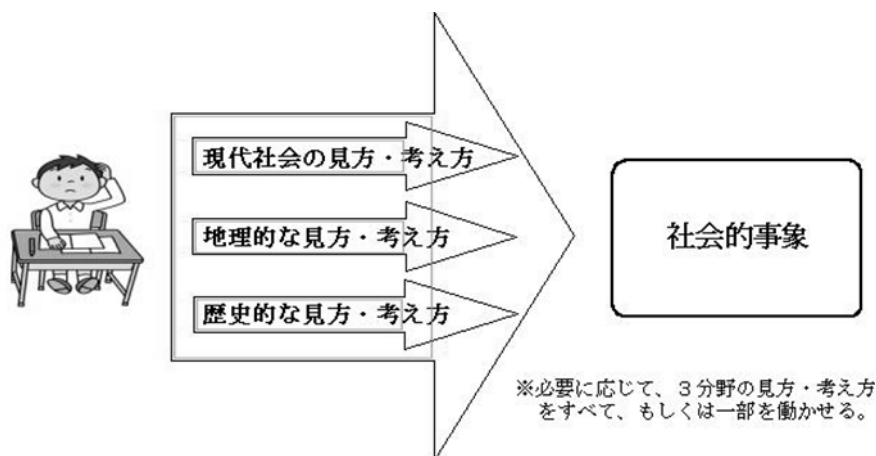


図1 本校社会科の考える「見方・考え方」

(1) - 2 資質・能力を見取るための評価の工夫

ア. 「学習の記録」

「学習の記録」とは、毎時間の授業の「まとめと振り返り」、単元全体の「まとめと振り返り」を記述させるためのワークシートである。

「学習の記録」のまとめから、生徒に「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」が身についたかを見取ることができた。

また、毎時間の授業後や単元の学習後に、社会科で育みたい資質・能力を育むことをねらって設定された「単元の学習課題」に対して、「その解決にどこまで近づけたか」、「次回からの学習で何を学ぶことが必要か」などを問うことで、学んだことを羅列させるのではなく、資質・能力ベースで自分自身の学びを振り返らせることができた。単元を重ねるごとに、生徒の記述にも深まりが見られ、前の授業や前の単元での学びを活かして、学習課題の解決に取り組もうとする場面が増えた。授業や単元の学習のはじめに、何人かの生徒の記述を共有したり、「学習の記録」に教師がフィードバックを行ったりすることを通して、生徒の学びを軌道修正したり、深めさせたりすることができた。

イ. パフォーマンス課題とルーブリック

すべての単元において、社会科で育みたい資質・能力を育むことができたのかを評価するためのパフォーマンス課題を設定した。パフォーマンス課題に対する生徒の取り組みは、教師が評価し、単元の学習の総括的評価として扱い、評定に用いる評価として活用し、次の単元の学習に生かせるよう生徒へのフィードバックを行った。

また、生徒自身にもルーブリックを用いての自己評価、または生徒同士の相互評価を行わせることを通して、生徒に自らの学びを振り返らせることができた。毎回のパフォーマンス課題の自己評価を終えたところで、ルーブリックそのものの評価や修正も行わせた。ルーブリックを評価したり、修正したりするには、単元の学習においてどのような資質・能力を高めればよいのかを認識する必要がある。そのため、この学習活動を通して、生徒自身に自らの目指すべき目標を自覚させ、自らの学びの振り返りを深めさせることができた。

(2) - 1 「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想

単元を構想する際に、「主体的な学び」のプロセスモデルをもとに、課題解決型の学習になるようにした。また、毎時間の授業を「主体的な学び」のプロセスモデルの各過程に位置づける。単元の学習内容によっては、すべての過程に位置づけることは難しい場合もあるが、「学びをつなぐ」という意味で重要な「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」については、必ず設定した。

(2) - 2 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫

本校社会科でこれまで取り組んできた「学習の記録」を活用して、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行った。「学習の記録」に、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」について記述する枠を設定する。「振り返り」や「方略調整」については、教師がコメントを行ったり、生徒同士で記述内容を交流させたりして、生徒自身が「自

らの学びを調整する」ことにつなげた。また、「全体の振り返り」については、「単元での学びの質や成果を振り返っているか」、「次の単元での学びにつながるような振り返りをしているか」、「単元の学習に粘り強く取り組もうとしていたか」という点に着目して評価することを目指した。

ただし、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、生徒の学びそのものを評価するものなので、学習前・学習中の自分との比較をさせる記述から評価を行う必要がある

(3) 残された課題

昨年度の実践では地理や公民において「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想の作成や評価の工夫を行ってきたが、次の点で課題が出てきた。まず、プロセスモデルを踏まえた実践では単元全体の見通しと振り返りの場面設定を位置づけ、形成的評価と総括的評価を行う単元を見据えた広い単元構想の計画が必要であることが分かった。また、実際に実践を試みると方略調整やまとめの時間に時間がかかるので、従来の単元計画時数では困難な場面も出てきた。そのため、必要に応じて単元計画の見直しや授業で行う場面と次時までの課題として取り組ませる場面も必要であるという意見も出た。そして、昨年度の実践では地理や公民のように単元全体で一つの主題に取り組む実践を行ったが、歴史の単元についてはまだ実践が進んでいなかった。歴史のように1時間ごとに取り扱う事象が異なる学習では方略調整はどのように取り組んでいくのか、また主題設定も時代を貫くような抽象的な主題になりかねないのではという反省もあった。

2. 本年度の研究

(1) 主題設定の背景

ア. 中学校学習指導要領（平成29年告示）

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説では、改訂の経緯を、以下のように説明している。

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。

子どもたちを取りまく「社会（注1）」は決して固定的に捉えられるものではなく、加速度的に、しかも複雑に変化し、予測困難になっている。また、大きく変化する社会が、必ずしも子どもたちにとってプラスの影響だけを与えるわけではないことも銘記したい。

そのような社会にあって必要なことは、よりよい社会となるよう一人ひとりが現状に満足することなく、自ら課題を見出し、その解決を目指して考え、行動し続けることである。学校教育の使命の一つは、「よりよい社会の創り手」を育むことにあると考える。

イ. 本校社会科で育みたい資質・能力

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編では、社会科の目標を以下のように示している。

「社会的な見方・考え方」を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

さらに、育成を目指す資質・能力を三つの柱に沿った形で以下のように示している。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
我が国の国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。	社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。	社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情、国民主権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることや、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

そして、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）で示している社会科の目標及び育成を目指す資質・能力に本校生徒の実態や課題点を踏まえて、本校社会科では育成したい資質・能力を以下のように考えてきた。

- ・社会で見られる（た）様々な事象や課題等に関することを理解するとともに、課題解決に向けて諸資料から様々な情報を調べ、既知の事象と関連付けたり、まとめたりすることができる。
- ・社会における諸課題について、他者の考えに触れながら多面的・多角的に考察し、その解決に向けて考え、新たな価値を創造し、周囲と議論すること。また、様々な方法で表現することができる。
- ・よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したり、他者の考えも参考にしながら、自分に何ができるのかを判断していこうとしたりすることができる。

※注 1：社会という語句には様々なとらえ方があるが、ここでは、社会を「人間が生活を営む現実の世の中」と位置づける。

ウ. 全体研究

本校全体研究では、「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成」を主題に掲げ、研究を進めている。「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造するための資質・能力」である。社会科の学びを通して育みたい「創造性」とは、大きな時代の変化の中で、「よりよい社会」という新たな価値を創るという視点で、社会課題を見出し、その解決に向かって、学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて解決を目指すことであると考えている。

そして、昨年度までの研究の成果と課題を生かして、「『主体的な学び』の具体像の深化」、「『主体的な学び』の評価」、「評価規準の設定と生徒への支援」について重点的に取り組む。特に、評価については1年次の成果と課題や昨年度の校内研究会に招聘した山梨大学田中准教授の助言などをもとに、「『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組み」を設定し、各教科で次の通り実践を重ね、「主体的な学び」に向けた指導と評価のあり方について研究を深めたい。また、「主体的な学び」を表出させる方法として「振り返りのワークシート」が活用されているが何を記述させれば生徒の学びの姿を捉えることができるのか、具体的にどのような支援が考えられるのか深めたい。そして、一人一台パソコンが実現している学年については、ICTを活用した振り返りを実践したい。

(2) 主題について

<p style="text-align: center;">社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成 ～「主体的な学び」の実現を目指して～</p>

本校社会科では、「昨年度までの研究の成果と課題」、「生徒の実態」及び「研究の背景」を踏まえて、主題を上記のように設定した。

グローバル化、外国人労働者の受け入れ拡大、第4次産業革命の急速な進展、少子高齢化などを背景に、日本の社会構造や産業構造、雇用環境は大きく、急速に変化している。また、多様なルーツや価値観をもつ人々が混在する社会となっている。その中で、身近な地域や国内、世界全体など様々なレベルで問題が発生している。そうした問題を、自分自身や社会全体との関わりの中で捉えたものが「社会における諸課題」である。

「社会における諸課題」を「自分事」として捉え、その解決に向かって、自らの考えや学びを振り返り、視点や方法を工夫しながら考察したり、構想したりすることができる生徒を育てたい。また、昨年度までの振り返りとして課題となってきた歴史的分野との関わりでは、次の2点に注目したい。1点目は、時代ごとの事象を現代社会の課題に結びつけ、当時の社会情勢と現代を比較し現代の社会における諸課題に目を向け、公的分野での橋渡しとしたい。2点目は、時代ごとに見られる課題について注目し、分析や判断を加えながらその時代における課題解決を目指していきたい。

そして、本主題は主体的に学ぼうとする態度の育成に重点を置きながらも、3つの資質・能力を一体として育てていく。そのために、一昨年度までの研究主題であり、本校社会科で培ってきた「見方・考え方」を働かせた学びやパフォーマンス課題等も意識した「主体的な学び」を目指

していきたい。また、研究主題実現のために昨年度の研究を生かしたプロセスモデルの活用、特に方略調整の場面での取捨選択や課題に対して根拠の検討など生徒自身が学習調整をおこない、学習課題の解決に取り組む「主体的な学び」を実現するために本年度の研究主題とした。

(3) 研究内容

2年次は、1年次の研究の成果と課題を踏まえ、「主体的な学び」の実現を目指して、研究を行う。具体的には、全体研究で示された『『主体的な学び』の具体像の深化』、『『主体的な学び』の評価』、『評価規準の設定と生徒への支援』について重点的に取り組む。また、社会科としての課題であった形成的評価と総括的評価を行う場面の共有および単元構成の見直しについても研究を深めたい。

ア. 「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想

単元を構想する際に、「主体的な学び」のプロセスモデルをもとに、課題解決型の学習になるようにする。また、毎時間の授業を「主体的な学び」のプロセスモデルの各過程に位置づける。単元の学習内容によっては、すべての過程に位置づけることは難しい場合もあるが、「学びをつなぐ」という意味で重要な「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」については、必ず設定したい。特に、単元を貫く問いを授業者が設定し、生徒は毎時間単元全体の問いについて振り返り、形成的評価や方略調整が意識できる単元、授業づくりを目指す。

イ. 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫

本校社会科でこれまで取り組んできた「学習の記録」を活用して、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行おうと考えている。昨年度は、「学習の記録」に、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」について記述する枠を設定し、「振り返り」や「方略調整」については、教師がコメントを行ったり、生徒同士で記述内容を交流させたりして、生徒自身が「自らの学びを調整する」ことにつなげた。一方で、生徒同士の交流では評価の観点を明らかに示すことや生徒同士でどの部分まで評価するのかなど課題も残った。また、「全体の振り返り」については、昨年度は「単元での学びの質や成果を振り返っているか」、「次の単元での学びにつながるような振り返りをしているか」、「単元の学習に粘り強く取り組もうとしていたか」という点に着目して評価を試みた。今年度も振り返りのワークシートを工夫し、相互に自己調整や評価ができるように目指していききたい。

また、GIGA スクール構想の実現として振り返りのワークシートを電子化し、より活用の幅を広げ、生徒の評価や学習の深まりに生かしていききたい。

そして、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、生徒の学びそのものを評価するものなので、単元の最後には「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点から資質・能力が育まれたかを見取るために学習前・学習中の自分との比較をさせる記述から評価を行う必要がある。

3. 参考文献・引用文献

- ・文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社
- ・中央教育審議会「中央教育審議会 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月21日）
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」（2016年8月26日）
- ・「学習評価の在り方ハンドブック」，国立教育政策研究所教育課程研究センター，2019
- ・松尾知明（2016）『未来を拓く資質・能力と新しい教育課程～求められる学びのカリキュラム・マネジメント～』学事出版
- ・山梨大学教育学部附属中学校（2020）「山梨大学教育学部附属中学校研究紀要」
- ・国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』東洋館出版社
- ・田村学（2018）『深い学び』東洋館出版社
- ・鹿毛雅治『パフォーマンスが分かる12の理論』金剛出版，2017年